

海外で心に残った記憶と背景

(ブラジル編)

2023年11月記 松村 眞

はじめに

海外を訪問すると、予期しない体験をして驚いたり感心したりすることがある。見聞きして面白く思うこともあれば違和感を覚えることもある。日本を訪れた外国人と接しても同様に、その時の記憶は時間が経っても容易に忘れない。意図的な結果ではないから他人に伝える機会は少ないが、印象が強いのでその後の参考になることも多い。本稿ではブラジルで経験し見聞きした驚きや違和感について、事例の状況と考えられる背景を紹介する。

リオの地球サミット参加 (1992年7月)

(リオデジャネイロ・サンパウロ・ブラジリア・マナウス)

1992年にリオ・デ・ジャネイロで地球サミットと称する「環境と開発に関する国際会議」が開催され、私も日本を代表するエンジニアリング会社の環境技術部長として参加し傍聴することになった。国際会議の目的は地球的規模で環境と開発の一体性を保持する合意を得ることにあり、国連に加盟している約180カ国が参加した。また100カ国余の元首または首相が参加するという史上かつてないほどの大規模な会議になった。会場に近いフラミンゴ公園が広大な展示会場になり、入口には大きなスクリーンに国際会議の状況が映し出されていた。展示会場では多数のNGO（非政府団体）や企業が、それぞれのブースで自分たちの活動を紹介していた。日本からも経団連や大阪市が出展し、パネルで環境保全活動を展示してパンフレットを配布していた。展示会場には大きなテント張りの会議場も設営されていて、国際色豊かにセミナーやイベントが繰り広げられていた。日本の団体が中心のテントもあり、1960年代の産業公害と対策を紹介して討議していた。自費で参加した若い人も多く熱心な態度に感心した。

私はリオに滞在した数日間、近くのホテルから展示会場に通い、スクリーンで各国の環境保全方針を見ていた。その合間にテントの会議場で討論を聞き歩き、NGOや企業のブースを覗いていた。面白かったのは数百もあるブースの展示で、一番多いのが約半分を占めた自然保護団体だった。日本で環境問題や環境対策というと、主に産業公害と都市公害から自然保護団体が多いのに驚いた。出展者は西欧諸国、アメリカ、カナダ、カリブ海周辺諸国、それに地元のブラジルだった。自然保護団体に次いで多いのは宗教団体で、ブースやテントのそばに大勢が集まり、ときどきお祈りをしていた。宗教団体の多くは環境破

壊を人間の欲望によるものとし、「物欲にとらわれずに足るを知れ」という主張を展開していた。私は一理あると思って妙に納得していた。私の業務に関連する産業活動の環境対策はブース全体の 1 割ぐらいしかなく、それも先端技術ではなかった。新しい有益な情報の収集を期待していたので少し落胆した。

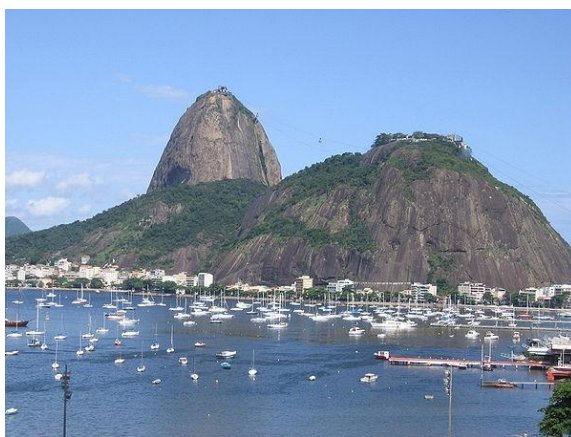
ブラジルは初めてだったので、1 日だけ市内の観光スポットを訪れた。もっとも有名なのはコルコバードの丘に立つキリスト像であろう。コルコバードの丘自体が高さ 710 メートルの切り立つ岩塊で、その狭い頂上に高さ 40 メートルの像を建てたのだから感心してしまう。1931 年のブラジル独立 100 周年を記念して建設され、今はクリスチャン人口が 8 割を超えるブラジルのシンボルになっている。コルコバードの丘に登った時



コルコバードの丘に建つキリスト像

はアプト式(歯車)の電車で近くまで行き、最後は曲がりくねった坂を歩いて登った。アプト式の電車は少し幅の広いトロッキで窓がない。よく繁った森の中を進むので、ときどき木の枝や葉っぱから身を守る必要があった。丘の上からはリオの街とシュガーローフの岩、そして青く広がる南の海を眺めることができ感激した。

リオを代表するもう一つの景色はシュガーローフマウンテンである。高さが約 400 メートルの一枚岩で、その形が砂糖の袋に似ていることからこの名がついた。リオの南東からグアナバラ湾に突き出た半島の先にあり、ロープウェイを 2 回乗り継いで頂上に登れる。



シュガーローフマウンテン



コパカバーナビーチ



シュガーローフの頂部



ロープウェイとゴンドラ

ゴンドラは 65 人乗りの大型で 20 分おきに運行していた。景色は素晴らしかったが、地上からあまりに高い場所に行くので不安になった。高度恐怖症の人は下を見ない方がよいだろう。私はどうやって岩の頂上に、このロープを張ったのか好奇心に駆られた。1912 年の建設だが、最初は頂部基地の建設に必要な資材を人が運び上げたのに違いなく大変な労力だっただろう。数百メートルのロープを張るのも大仕事だったはずだ。

シュガーローフの頂上から見えるのが 4 キロメートルも続く有名なコパカバーナビーチで、その先にイパネマ海岸がある。ボサノバ「イパネマの娘」で知られたビーチである。コパカバーナのビーチには立ち寄っただけだが、ホテル群と海の間広がる砂浜が非常に広く、体格のよい褐色の若者たちがビーチバレーに興じていた。リオは絶景に恵まれて実に美しく生涯の思い出に残るだろう。一方、街中は貧富の差が激しく、豪華な住宅地区に隣接してスラム街が広がっていた。丘の斜面にも小さな掘っ立て小屋が軒を連ねており、衛生状態も治安も悪いとのことだった。地球サミットの開催期間中は外国人への犯罪を防ぐために軍隊が動員され、装甲車や銃をもった警備員を随所に見た。住民の立ち入り禁止区域も多く見られた。

リオで数日間を過ごした後、サンパウロで同じ時期に開催された環境技術の展示会も見に行った。リオの展示会は NGO など市民団体の出展が多かったが、サンパウロの展示会は企業の出展が多く、参考になる技術が少なくなかった。日本からも名の通った環境装置メーカーが出展していた。サンパウロの街を歩くと日本語の看板が多くみられ、お土産を売る店では日本人の従業員が接客していた。サンパウロはリオに比べて日本人が圧倒的に多く、日本語もかなり通用した。なお、ブラジルは移民が多いせいか多様な人種が混在している。混血が進んでいるので兄弟姉妹でも顔立ちが全く違うことがあって驚いた。ヨーロッパ系の長女の妹が東洋系だったり、その下の妹がインド系だったりした。背が高くて

エキゾチックな美しい女性が多かった。サンパウロの次はブラジルの首都ブラジリアを経由してアマゾンのマナウスに行った。

マナウスは大西洋に面したアマゾン川の河口から 1500 キロメートルも上流に発達した都市で、アマゾン川の本流とネグロ川の合流地点にある。19 世紀に天然ゴム、コーヒー豆、ジュート（麻）の集積地として開かれ、アマゾン地域の経済、交通、流通の要衝都市として繁栄してきた。日本からは本田技研やヤマハ発動機が進出しており、日本人学校も開校している。韓国からは LG 電子が、ヨーロッパやアメリカからも製造業が進出している。街を歩いたらパナソニックの看板が目に入ったので、入ってみたらやはり日本製の家電製品が多かった。

マナウスの人口は約 150 万人で、アマゾン地域最大の都市である。国立公園や環境保護区が隣接しているので、アマゾン観光の中心地としても有名である。旧市街地には、19 世紀に建設されたヨーロッパ風の建物が多く残っている。有名なのは 1896 年に建設されたアマゾナス劇場で、外装も内装も豪華で素晴らしい。内部の壁画はフランスとイタリアの画家によるものである。建築にはマナウスの良質な木材を一ロッパに送り、加工して返送されたのを使用している。大理石はイタリアとポルトガルから、鋳鉄製の階段や手摺はイギリスから輸入したものである。



アマゾナス劇場

アマゾン河は雨季と乾季で水量の変化が大きいから、マナウス港の浅橋は 16 メートルまで上下できる構造になっている。浅橋には日用雑貨を積んで流域の集落を往復する商船、



マナウス港の浅橋



マナウス港の水上市場

フェリー、漁船、アマゾン探検船などが並んでいた。大きな商船が到着すると、魚や果物を積んだ小舟、民芸品や日用雑貨を積んだカヌー、それに水上タクシーが集まってくる。水上マーケットができて賑わいを見せるのだ。港で人目を引くのは、アマゾン流域を廻る定期船と上下2層の大型客船である。これらの船に燃料を供給するのは川に浮かぶガソリ



大型客船



水上ガソリンスタンド

ンスタンドで、水中に浮いていることを除けば地上のガソリンスタンドと変わらない。屋根の上には見慣れた石油会社の看板が載っている。

大型客船の甲板の梁には、ハンモックを吊るフックが1メートルほどの間隔で取り付けられている。乗客が自分のハンモックを持ち込んで吊るすのだが、場所取り競争があるらしい。年間を通して最低気温が 23℃、最高気温が 33℃ぐらいだから、船室の床ではなくハンモックで寝る方が快適なのであろう。港のそばには税関、魚市場、郵便局、教会、博物館などがあった。魚市場を覗いてみたら日本の魚市場と変わらない活気があり、ここが川だということを忘れてしまう。驚くのは魚の大きさと、1メートルクラスのナマズや数メートルもあるピラルクーという魚が並んでいた。



マナウスの魚市場



ピラルクー（白身、美味）

マナウスでは観光船に乗ってネグロ川のクルージングを楽しんだ。船が川幅の少し狭い支流に入ると、沿岸にポツポツと高床式の小屋が建っていて、子供がこちらを見て手を振っていた。屋根は茅葺きのようで大きな窓にはガラスがなく、代わりに葦でできた扉がついていた。8人ぐらいの家族全員が背の順に並んで、屈託ない顔で笑っているのが微笑ましかった。川岸には家族経営の小規模な牧場が多く、色が白くて角が横にでているブラジル特有の牛が草を食んでいた。お土産を売る小屋もあって、私はピラルクーの鱗でできた小さな人形を買った。

クルージングの途中で3人乗りぐらいのカヌーに乗り換え、もっと浅くて狭い支流に行くと子供が小さなワニを捕まえていた。夕食のおかずにするらしい。周りは鬱蒼とした熱帯雨林で、高い所に大きな鳥が見えた。カヌーには釣り竿が用意してあり、ピラニアを釣らせてくれた。簡単に釣れるかというところではなく何度も餌だけ取られた。餌は牛肉なので、ピラニアより値段が高いのではないかと思った。ピラニアが針にかかると、現地のガイドが針からはずしてくれた。慣れないと鋭い歯に噛まれて怪我をするからである。カヌーから観光船に戻ると、釣ったピラニアを大きな鍋で丸ごと揚げて食べさせてくれた。白身で淡白な味だった。

マナウスで泊まった大きなホテルは木造建築で、落ち着いた雰囲気があり寝室が広がっていた。敷地が広く動物園まで併設していた。構内には10軒ぐらいの店が並び、お土産だけでなく日用品も売っていた。アマゾンの熱帯林に入る人のためだろうか、皮膚に塗る虫除けの薬や蚊除けのスプレー、それに寝るときに使う防虫ネットが売られていた。こんな場所のホテルでも日本人が働いていて、案内をしながら現地の画家が描いた画集を販売していた。独創的でインパクトのあるよい絵だったが値段は安くなかった。違和感があったのはホテルの水で、不潔とは思えないが少しヌルヌルしていた。ホテルが川の水を浄化して使っているのだろうが、濾過装置の性能が不十分ではないか気になった。

マナウスにきた目的は国立のアマゾン研究所 (INPA: Instituto Nacional de Pesquisas da Amazônia) を訪問して情報を収集し、研究者と意見交換することにあつた。郊外にあるアマゾン研究所には世界中から研究者が集まっており、学生向けの教育機関にもなっていた。自然保護活動とジャングル実験区の運営を行っており、ワニや淡水魚のマナティなどが飼育されていた。構内の科学の家と称する棟には研究活動の常設展示があつた。広い敷地はジャングルのように、散歩道やカヌーによる散策路も設けられていた。ここでは研究者たちと情報交換したが、生物学と医学の分野が多く、私の仕事に関連する工学分野が少なかった。しかし長年にわたる彼らの地道な活動に頭が下がる思いがした。

10 日ほどのブラジル滞在を終えた私は、マイアミを経由してワシントンDCに飛んだ。この時期に大規模な環境関連技術の展示会があり、世界中のメーカーが出展していたからである。ここでは大規模で高度な廃油処理技術に目を惹かれた。というのも、日揮でも廃潤滑油を燃料油に再生する設備を設計・建設していたからである。だがここで見つけたのは市町村の広さではなく、都道府県の広さを対象に廃油を集めて処理する設備だった。広域処理なので処理量が日本の場合よりはるかに多く、設備はミニ製油所のような感じだった。処理量が多いから高度処理が可能で、再生油は重油よりも付加価値の高い軽油にしていた。複数の大都市で処理設備を建設しており、実績が多いので信頼性の点でも安心できると思った。私に関心を示したので、このメーカーは技術資料とビデオテープを提供してくれた。帰国したら日本とアジア地区を市場に、技術提携か技術導入を考えたいと思った。

ブラジルの社会的な背景

- ① ブラジルに住む人は入植者、独立後の流入移民、アフリカの奴隷、ブラジル先住民の子孫たちで、多くはポルトガル、イタリア、スペイン、ドイツ語圏の出身者である。日本やポーランドの出身者も多い。このため外見では容易に出身圏を識別できない。
- ② 日本との関係は 1895 年から始まり、1908 年 6 月には日本からの本格的な移民が始まった。その後、第二次世界大戦中の断交と 1950 年代の国交回復を経て、今は活発な人的・経済的な交流が行われている。距離の遠さにもかかわらず、世界各国の中で特に日本との縁が深い国である。ブラジルに渡った日本人移民の子孫が 5 世・6 世になり、サンパウロでは日本人街「リベルダーヂ」を形成している。日系ブラジル人には政治や経済などで高い地位に就く者が多く、長年の農業における貢献が非常に高い評価を得ている。
- ③ 日本の高度経済成長期にかけて、東芝・トヨタ自動車・東京海上・コマツ・ヤクルト・日本航空など多様な業種の日本企業がサンパウロを中心に進出している。ブラジル国内には複数の日本人学校があるが、日本にもブラジルの音楽・スポーツ・料理などの文化交流施設がある。
- ④ ブラジルは 1822 の建国以来、長らくイギリス・アメリカ・日本からの重債務国だったが、1968 年から 1973 年にかけて「ブラジルの奇跡」と呼ばれる高度経済成長を達成した。しかし第一次オイル・ショックで挫折を余儀なくされ債務が激増した。
- ⑤ 公衆衛生や教育などの公共サービスが、先進諸国に比べて低い水準にある。沿岸部と大陸内部は経済的な格差が大きく、したがって貧富の差も大きい。しかし近年は財政の好転を背景に急速に改善されつつある。貧困層の生活水準の底上げは内需の拡大にも貢献している。
- ⑥ 工業は安価な労働力と豊富な天然資源を背景に、2004 年度の国民総生産（GNP）が

世界第9位になり、南アメリカで最大の経済規模に達している。農業では19世紀までゴム栽培を独占し、アマゾン川中流域のマナウスが大繁栄した。しかしペルーやボリビアなど周辺国のゴム栽培が拡大し、19世紀後半に大きく衰退した。

- ⑦ 牧畜は都市近郊の農家で集約的な経営が行われるようになった。サンパウロなど大都市の周辺では、近代的な養鶏システムが採用されている。牛肉については口蹄疫の問題が存在しているが、2001年以降は発生が報告されていないことから清浄国として扱われている。一方、アマゾンやパンタナルの熱帯雨林地域では、森林を伐採して大規模な牧場を造成し、環境破壊として問題視されるようになった。
- ⑧ 独立後の帝政期にかけて北東部ではサトウキビのプランテーション栽培が盛んだった。労働力としてはアフリカから連れてきた奴隷を働かせていたが、アメリカで奴隷制が廃止されると主流作物がサトウキビからコーヒーに移った。なお、サトウキビは砂糖の原料になるだけでなく、現在はバイオエタノールに精製されてガソリンの代替燃料に使われている。
- ⑨ 貧困層がアマゾンの熱帯雨林で焼畑農法を行っており、自然環境の破壊につながると問題視されている。しかし森林を大規模に焼き払うのは個人ではなく、農業生産の収益拡大を目指す企業が多い。一方、ブラジル東北部の乾燥地域では、政府が募った入植者が農業を展開している。しかし、まだ都市部との経済格差が大きい。森林率の減少に歯止めがかからないので、近年では人工衛星を使った監視網が整いつつある。
- ⑩ ブラジルの面積は約850万平方キロメートルと日本の23倍もあるから、地域による自然環境と気象条件の違いが大きい。人口は約2億1千万人だが、人種が多様でそれぞれ歴史的な背景が異なる。このためブラジルを理解するには、地域別か産業分野別など着目する側面ごとの状況に基づく認識が必要である。
- ⑪ 現地を訪問するとアマゾン川の大きさに圧倒される。ベレンの河口は川幅が120キロメートル、マナウスでも40キロメートルもあるから外観は海と変わらない。沿岸の住民はアマゾン川の自然と密着した生活を営んでおり、貨幣経済の統計とは隔たりがあるように思える。先進国からの訪問者としては羨ましく思える場面も多かった。

海外で心に残った記憶と背景（ブラジル編） 終わり